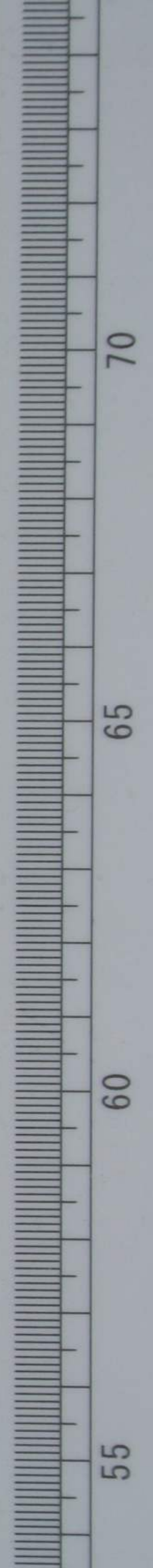


純正詩社發行





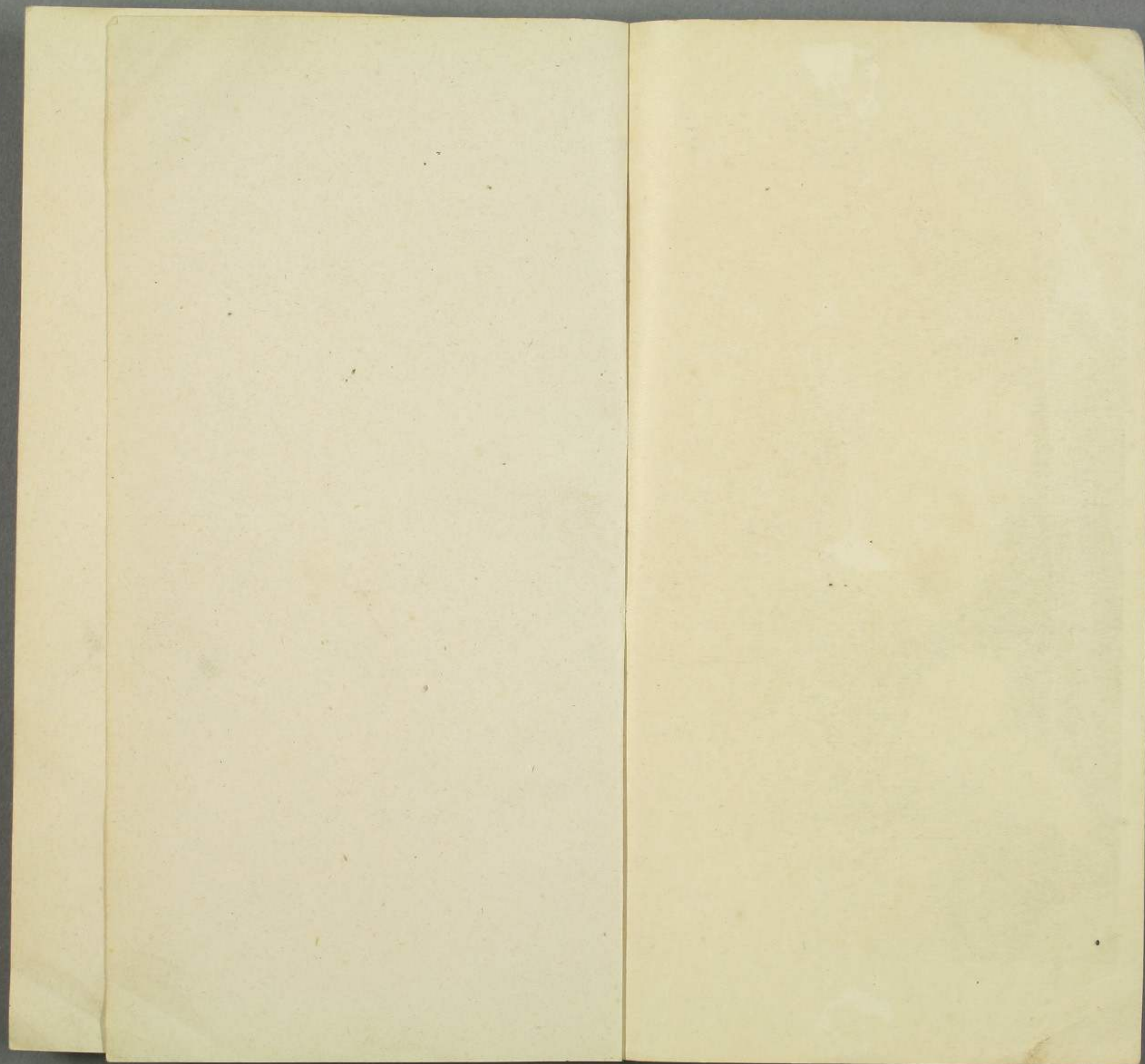




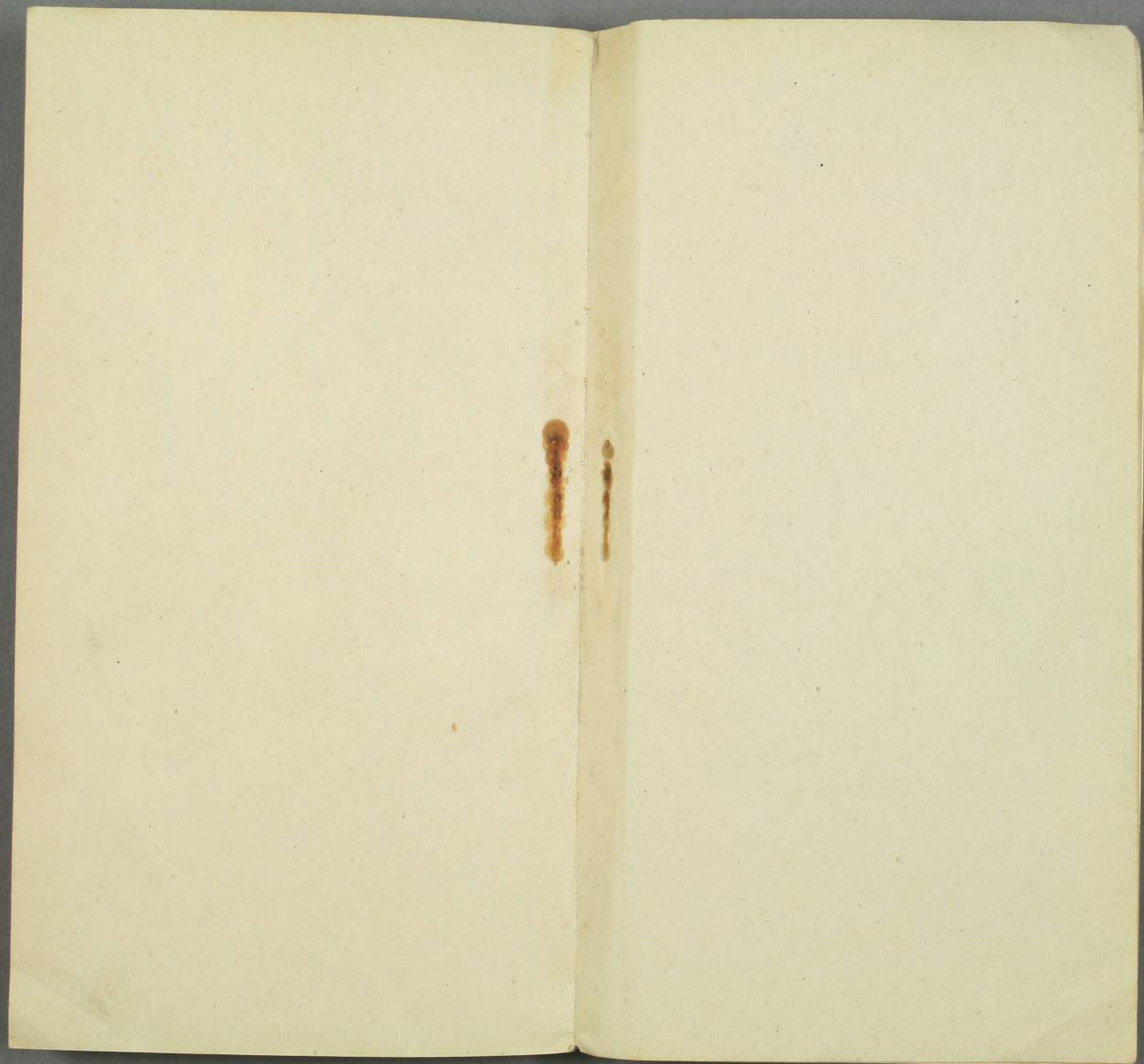
朝風詩歌集第三篇

3  
1

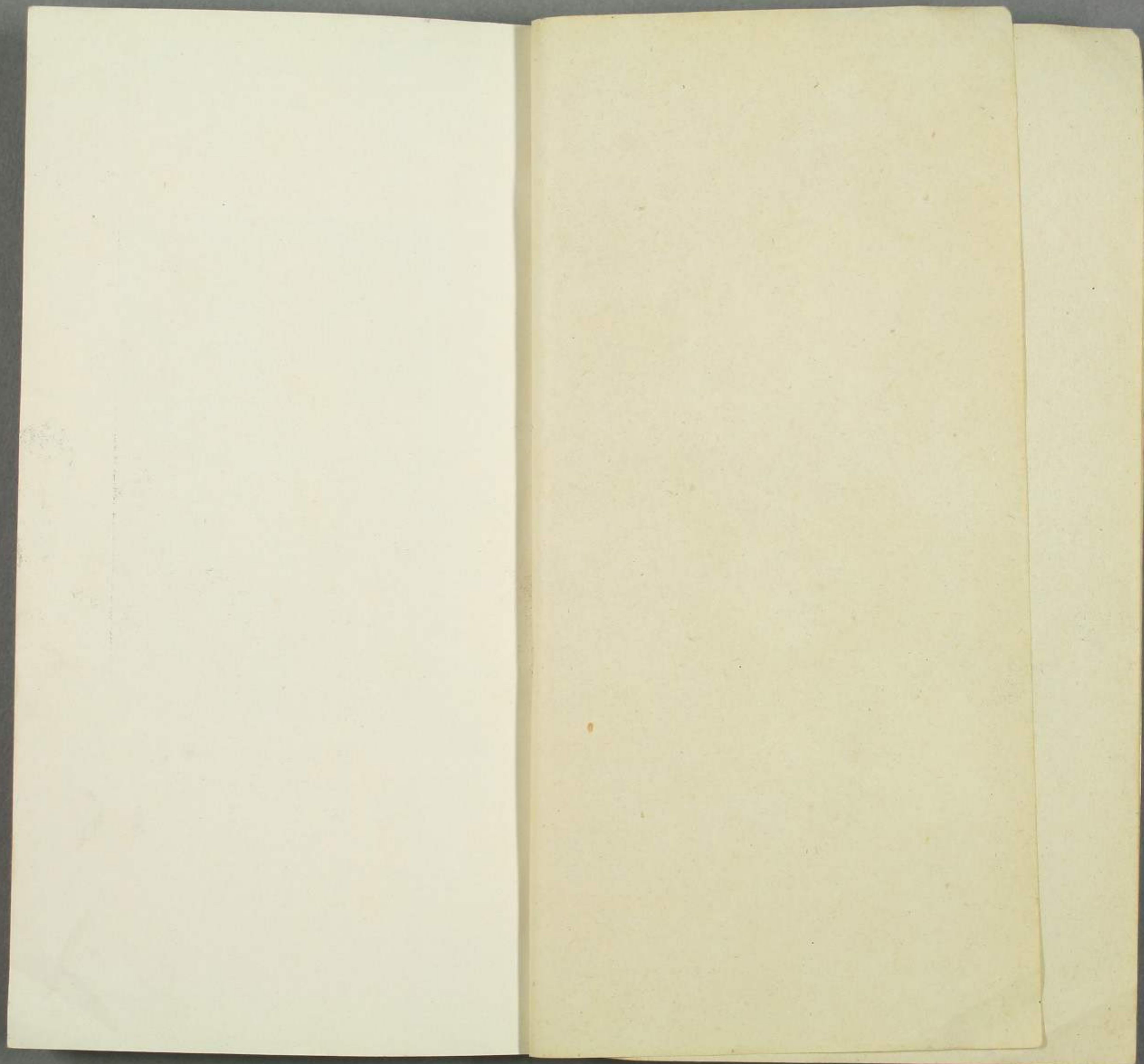














朝風詩歌集第三篇

即興詩集

唐

人

笛

新俳句集

ち

る

柳

西出朝風著



(新)男長のそと者著

撮九一・五・八一九一



長短詩にどんな新様式が創造されようと、それを僕は少しも否定する者ではない。然し詩の純粹と故郷とは純正詩——日本語詩に於ては音數、音脚、單音の三者を貫いて有形旋律を持つた律語詩——にある事を信ずる。

さうして獨り詩といはず、思想なら、好尚なら、世を擧げて散文的たらうとする時代にあつても、一人位搖籃の日を愛慕する心持で純正詩の絃を奏でてほしいと思ふ。即興詩集「唐人笛」はかうした心持から生れた。

俳句は短歌、旋頭歌等と同じく最初から固定した音律上の約束を持つてゐる。



固定した音律上の約束以外全く自由であると共に、この約束によつてその名稱は存在する。

従つて明治の後半に於て詠嘆の内容に迄ある制限を設けようとした一派乃至明治の末年から最近へかけて根本生命たる音律上の約束を破壊してなほその名をおかす一派等の俳句の謬つてゐるのは言ふ迄もない。

俳句に倣つた骨董品を作る事、俳句に飽足らないで他の形式へ赴く事は勿論自由だが、もし正しい俳句に自己の詠嘆を託さうとする者があつたらしくも僕の辿つた道に發足す可きをここに宣する。

著者

即興  
詩集

唐

人

笛



此一篇を伊東音次郎氏に呈する

うすい光に

うすい光にてらされて

わがかなしみを見かへれば、

雪にうもれて白兔

あはれにちさくほのぼのと

「春がとほい」と泣いてゐる。(大正七、一)



宵の灯

つとめてくれば北こくに  
にはかに立つたこがらしの  
宵のあかりが身にしみる。  
僕のいつつの新はなちゃん  
ババはお酒がのみたいよ。(大正六、初冬)

花 柊

おもひあまつたほく國の  
よるのしぐれのやるせなさ、  
—— 胡粉の花のひひらぎの  
萌黄のほひ身にしみて ——  
またちりかかる板びさし。(大正六、初冬)



夜 曲

秋がゆく夜の板びさし  
雨がかかればせんもなや、  
蟲がむせべばせんもなや、  
わが子が泣けばせんもなや。(大正六、晩秋)

犬 蓼

川のほとりに犬もふめ。  
ただわがための臙脂いろ、  
それもほのかないぬ蓼の  
花とも見えぬこなの花  
いまこぼれるか、ほろほろと。(大正六、秋)



この眼を覆へ

いまこの日わたしは氣づく、  
三十のどしはさまさま  
見てならぬものを見せたが  
ことさらに戀の瞳が  
見てならぬものをうつした。

この心人にはしつて  
——ゆく水の瀬にもせかれず——  
ひとすぢになげく時すら  
どもすれば親、子、妻、友、  
さて人のなかにまじつて  
お互に——暮れてゆく空——  
もの言はぬ姿眼に浮く。



かつはまた山の眞晝の、  
原の夜<sup>よ</sup>の、うれしあふ瀬の  
風のねをしのぶときにも  
ともすればただ草生ひて  
星しろく、ほかにものない  
おそろしいさまを眼<sup>め</sup>にする。  
いまこの日わたしは氣づく、

三十のとしはさまざま  
見てならぬものを見せたが  
ことさらに戀の瞳が  
見てならぬものをうつした。  
人よ、きてこの眼<sup>め</sup>をおほへ、  
さきの日のかりのたはむれ  
「見ちやいや」と言つてしたやう



やはらかい両手の指で  
憎ましいこの眼をおほへ。

人よ、きてこの眼をおほへ、  
やはらかい両手の指で。

反 歌

人よ、きてわが眼のまへにたちつくせ、  
きみをみつめておもひ死ぬまで。(大正五、八、二五)

### 風は光は

風は光は水は木は  
かぎりしられぬさびしさの  
ながい命であるものを。

人のところが風や木の  
ながい命にかよふさき



なんでさびしくないものか。

ふたりの戀がもえもえて  
かぎりしられぬよろこびの  
たかい梢へのぼるとき、

たとへば水のしたたりが  
胸のくさ葉をぬらすやう

せめて泣かいでよいものか。(大正五、八、二二)

オ

たとへばそれは蠟燭の  
ほのほのやうに身を燃やす、  
もやさにや、つらや、灯ひがきえる。(大正五、八、二二)



淺

春

冬のなごりをまだ見せて  
雪がちらちらふるけれど、  
河岸の柳はさむさうな  
影をおとして立つけれど、  
土にかくれた春の血は  
うちの力にたへかねて

路にちまたにをどるぞえ。(大正五、三)

暗い夜みちを

——ある文の後に——

「くらい夜みちをいつまでたどる？」

「つぎの朝日ののぼるまで！」(大正五、二、九)



神 經 よ

神經よ、もつともつと細く  
青いほのかな糸になれ、  
そしてそよどの風にも鳴れ。(大正五、一、一八)

雪のあかりが

ながれながれて故郷こきやうへくれば  
つまの缺け櫛、子の泣顔に、  
雪のあかりがさすわいな。(大正五、一、一八)



あかんぼの眼

赤んぼの眼めには、  
赤んぼに似た眼めには、  
あらゆるものがみな不思議だ。  
花がみになるそのことも、  
人が子をうむそのことも、  
うまれて貧富のあることも。(大正三、初冬)

ポ  
ン  
チ

一 景

茶目がはだか飛出した。

二 景

やつてきたのは柳原、  
著物を買った。足袋そへて。

三 景



下駄屋で下駄を買つてはき、  
となりの帽子屋へはいつてく。

四 景

山高帽子をかぶりこみ  
そつくりかへつた眼のまへに  
ならんだ、時計、鼻眼鏡、  
くさりに指環。  
番頭が

世辭をやたらにのべてゐる。

五 景

やがてきたのが眼鏡橋、  
橋のたもとの辻待の  
車夫にくるまをいひつける。

六 景

ごむ輪のうへの茶目さんは  
ごこから見ても好紳士、



髭のないのがさびしいが  
それもそのうちはえるだろ。(大正三、初冬)

斷曲の一

年は立つても垣根の草は  
きのふより今日けふ枯れてゆく。(大正三、初冬)

となりでは

となりでは  
夫婦わかれをきのふした。  
ひとくちに  
女郎あがりといふけれど  
亭主から  
すこしやさしく言はれれば



眼めをほそめ

よろこぶただのつまだつた。

そのつまは。(大正三、秋)

## 斷曲の二

土のしたから芽をふくやうに

仕置のしたから人になれ。(大正三、初冬)

## 帆

築地の路の秋のくれ

そつと柳のちるときに、

ときどき町の屋根よりも

たかい、おほきな、灰いろの

翼のやうな帆がとほる。(大正三、秋)



しぐれさん

みなすぎました、しぐれさん。

命をかけて購へるなら  
いのちをかけて、ものみな  
ほろびをかけて購へるなら  
ほろびをかけて購ひますが、

みなすぎました、しぐれさん。

一の言葉も、二の、三の  
言葉もすべて嘘でした。

一のわかれも、二の、三の  
わかれもすべて嘘でした。

しかし八年十年の



日を経たけふはものみなの  
ほろび、命をかけた  
すぎた八ねん十ねんの  
嘘の一つが購へません。

みなすぎました、しぐれさん。  
泣いてください、泣けるだけ、  
嘘の購へないけふのため。(大正三、秋)

### 部室のうち

人は見た、窓のそこから。

いきなりそばの棒きれを  
壁へぶつけた彼を見た。

やがてせはしく箸とつて



めしくふ彼を人は見た。

やがて霜見た葉のやうに  
ふるへわななく彼を見た。

またやがて惱みに堪へぬ  
顔をうつむく彼を見た。

ものをはりに  
からだみんなをうつぶして  
著物につつむ彼を見た。

ものをはりに人は見た、  
黒い著物のかたまりを。  
窓のそこから。(大正三年)



品川小景

しゆくのこみせ小店の横あひの  
ながし口から往來を  
ちよいとこのぞいた白い顔、  
紅いしかけ襦袢はたれゆるもえる。  
はやくおかくれ、お巡りまはさんが

いまにくるから。風邪をひく。  
明日あすは冬立つ宵の風。(大正三、晩秋)

月はかなしや

月はかなしや、霧も、木も、  
秋の灯ひさへもちつとして。(大正三、秋)



短景

赤煉瓦塀。かご柳。  
柳のしたの秋ふけて  
水がながれる、ちろちろと。  
都のなかの宵の口。(大正二、秋)

笛

屏風もうつつる秋のよの  
女郎のお部室の紅い窓。  
ごこの息子の放蕩か  
あかいなかから笛が鳴る。(大正二、秋)



温室の悲劇

身うちにひそむよるこびに  
ふるへて咲いた白い花。

電氣の夢の灯がどけて  
汗ばむ夜の温室に  
わななき躍る白い花。

むろにむされて香にまよふ  
あはれにちさい蟲ひとつ、  
ふるへわななく花の底  
薬にすがつて死んでゆく。(大正二、晩夏)



いろ里

月はなけれど青蚊帳を  
月夜の森の葉と見よう。  
月にうかれたももち鳥  
夢から夢をどぶやうに  
「花鳥はなどりさんのお引けだよ……。」(大正二、八、一五)

悔の日暮

しろくつもつた雪ながら  
日暮はかなし。うすぐもる。  
ひけた校舎の窓のした  
かれ木の幹に顔あてて  
姿もあをく人の泣く。(大正二、八、一五)



夫 婦

「なせ妻をもつた」といふの？  
ちよつと返事ができかねる。

「もつてどうした」といふなら  
それは返事がすぐできる。

きまじめな先生に、君！

この五六年なつてきた。(大正三、八、一四)

マッチの商標から

きいろい空へ血のやうな

赤い光のさすなかを

黒いつばめが飛んでゆく

——そらの曇りに毛がぬれて——。

つばめをめぐる黒い輪は



虹か——恐怖の、沈黙の

虹か——、楕圓の輪のなかに  
かばねのやうな文字が散る。

くろ輪のそとに天候の

不穩をしらす雲に似て

かたちきまらぬ蜘蛛のよな

模様が足を、手をのばす。

くろいつばめは飛んでゆく

——まつかなそらを飛んでゆく——。

ああどこまでも、どこまでも

まつかなそらを飛んでゆく。(大正二、夏)



しぐれ

十一月の往來に

さむいこまかい雨が泣く。

雨のあひだに青桐の

おもひだしては葉のおちる

あをいつめたい幹が泣く。

さむいこまかい雨が泣く——。

桐のうしろの家なみの

乳屋のかごのがらす戸に

ミルクホールと金が泣く。

さむいこまかい雨が泣く——。

金のあひだに、がらす戸に、



顔おしめててうつくしい

色情狂のおと娘

男こひしとすすり泣く。(大正二、晩秋)

### 断曲の三

稼ぐにおつつく貧乏が

あつたらごうする。秋の風。(大正三、秋)

### かくれ家

わたしは衣食のくらしから、

戀の腐つた長屋から、

電車のすみへにげてきた。

街の電車へ——たえまなく

うごいてやまぬわが家へ。



ふとある町をとほるとき

熱帯國の鳥のよな

衣裳をつけて、鳥のやう

歌と戀とに身をなげた

女のむれを見るだらう。

がらすをはめた窓したに。

またある町をとほるとき

とほい國から學問を

をさめるためにはるばると

海こえてきたうら若い

娘がひよつと乗りもせう。

あをざめはてたわがそばへ。

そのうちとある公園の

まへへかかれはつ冬の



きばんだ木木の葉のなかに  
湯氣にひたした珠のよな  
宵のあかりがつくだらう。

はやく行け。わがたえまなく  
うごいてやまぬなつかしい  
家よ、電車よ、はやく行け。(大正一、晩秋)

### 零時のかなしみ

墓場のやうな町の家なみ。  
たまたまあかい燈をつけて  
ゆくは終電車。  
ほのかにほふ湯屋のおとし湯。  
ひとりあかるい自動電話が  
辻に泣く。



——いま休日がつきようとして。(明治四二、初冬)

### 斷曲の四

本が買ひたい。女がほしい。  
ながく生きたい。秋の風。(大正三、秋)

### 淺草へ

「君はどつちへ？」  
「淺草へ。」  
「なにしに君は淺草へ？」  
「宵の灯あかりを見に淺草へ。」(明治四二、秋)



おもひ出

青びいごろをはつたよな  
光つて、ひくい、おほ空へ  
させばとごくとちさい手を  
「きよ」の背なかでのばしたが……。  
路の横手の茶ばたけの  
柿の木の實が赤かつた。(明治四二、初夏)

新俳  
句集

ち

る

柳



此一篇を岡野知十先生に捧げます

第一輯

明治四十二年春——大正三年秋

夕立の雲がそのまま暮れてゆく。

もの言はぬこのうれしさよ。秋の草。



晝の月高ゆく。野萩。花すすき。

こすもすや。石炭桶が宙をゆく。

鍔びろの黒い帽子が買ひたいな。

酒氣さけなくあるくはかなし。ちる柳。

はる風に鮑屑とび暮れてゆく。

木の芽きふくころはかなしい辻便所。

さびしければ男もいちる袂さき。

かなしい日親は子を、子は親をもち。



つまらないことが心をくらくする。

夏の晝、空氣銃のたまが飛んできた。

神経の焼けるにほひがなつかしい。

ある晝は女郎ももの縫ふ、ものあはれ。

秋立つや、しろい巡査のうは著から。

酔ひどれはどこでたふれる。秋の風。

こほろぎや。土にすわつて笛をふく。

わたり鳥見る街のおまはり。



「ひろひ」うた、だんだん夜がさむくなる。

以下八首明治四十四年歸省して

蜂の巢よ、幾ねんまへにやぶれたか。

ふるさとや、追つてもにげぬ庭の鳥。

ふるさとの秋の空見た。死ぬもいい。

まだ死なぬつんぼ石工よ。晝の蟲。

なつかしや、心かなしや、屋根の草。

夕ぐれや、蝙蝠のよな鶯のこゑ。

半日は老人たちと釣魚をする。



なんとなくさびしい話「鮭がきた。」

酒の香<sup>か</sup>が骨にしむやう溺れゆく。

朝霧や。餓ゑたところが眼<sup>め</sup>をひらく。

しみじみと犬にもものいふ若葉かな。

上野公園

そら見れば西郷の眼<sup>め</sup>も日がくれる。

くもり日のなかに鳥なく五<sup>ご</sup>ぐわつかな。

いたましく胸をつく木<sup>き</sup>のにほひかな。

しき石の香<sup>か</sup>にしめりゆくものおもひ。



しめやかに暮ればにほふ屋根の草。

町なかに木の香をためた普請小屋。

相おもふ、町の柳と灯のやうに。

撒き水が縞目のままで夜になる。

撫子や。屋根のうらにも人が住む。

さみだれのながく流れた灯のほひ。

新緑や。雀のこゑが壁にしむ。

噴水のちる水を見てねむる時。



町の灯ひのわづかにとどく窓に倚る。

草の香かや、息づまるやう人戀し。

こほろぎや。いまはに誰をおもひだす。

蟲なくや。わかい男にすてられて。

秋も、日の影をあびるがなつかしい。

わか葉のなかにのこる街の灯ひ。

六月のくもり日かなし、絲車。

東京をとほくながめて、おち葉かな。



冬の夜の汽車ほごかなしいものはない。

日の缺片のひとつこぼれた冬の家。

した町の師匠が冬の家へきた。

春の日や、日もすがら砂がくづれる。

ふたりしかしらないことだ。ほととぎす。

遺言もいはないで、なせ死んだのか。

けふもまた窓へくる青い停車場。

おともなく夜へかくれる夏の雲。



夏の日がまたうすぐもる、眼のまへに。

なつの雨、小鳥のとぶがなつかしい。

そのときも愁はあつた。古い街。

灯を見ればあてなくでるが癖だつた。

秋の夜の女よ、君もつかれたか。

足はまた、また秋の夜の灯の町へ。

秋の灯の明日はかたるな、路地の口。

相戀うてつまにならない子がほしい。



漂泊の第一日や、夏やなぎ。

戸をできればまた黄な眼めして春の月。

波ごもがそとをゆくよだ。ほととぎす。

屑買や、夏の垣根に日がくもる。

夏ゆふべ、飴屋が花のうへをゆく。

かみなりす。父となるおそろしさかな。

新聞を賣る辻の子よ。夏やなぎ。

生きてゐるけふをよるこぶ若葉かな。



春の水死んだ眼のやうな月浮く。

椿ちるや。ものやぶれるはなつかしう。

甘酒屋けふも人待つ柳かな。

春の日の僕を見てわく烟かな。

春の日や。かぎりない生せいのいとなみ。

夏の雨名しらぬ草の香もまじり。

パンむしる乳屋のそとや、春がゆく。

だれやらに似た眼めを見ればものがなし。



ゆく春や、赤い柱のしたに立つ。

午後一時、肌のにほひをかいで寝る。

光のないときわきがたい眼に遇つた。

僕もゐる、春のめし屋の灯のむれに。

つばくらや、いま居酒屋に灯がついた。

春さめや、雨だれをかぞへて眠る。

春の夜や、いろいろの鼻があつまる。

冬の日や、湯屋のながしを乾さぬほど。



春がきた、辻にしやがんだ柳等に。

さみだれや、壁が泣くうすぐらい家。

いく時か木の實の熟す香をかいで。

春やみや、葉卷の香路にただよふ。

春の日は窓まで、ひと室おいて寝る。  
春の日につかっても心さびしい。



第二輯

明治四十一年夏——同初冬

秋の日は町にあくたを照らしけり。

朝顔や。市いちのごよみにゐてねむる。

うつくしき人等あゆみぬ。星の影。

はつ秋や、人ををろがむ檻の熊。

美しくしき夢に遇ひけり、秋の町。

秋の日や、わたつみはさみしかるらむ。



秋の日や、ベリカンと淺草にゐぬ。

人こひし、星のひとつを見ぬほどに。

もろむきに人ははしりぬ。秋の虹。

秋の路、あつきなさけのなかをゆく。

秋の日に夢のそびらをてらされて。

稻づまや。ねたみ相嚙むなかにゐぬ。

工女等はけふも街見ぬ、秋の壁。

をちにゐて呪ふはたれぞ、秋の闇。



洪水を母と二階にながめけり。

あき風や。無事とおもふと父のふみ。

はつ冬の日はわが母のすがたして。

冬にぬぬ、妻つまの眼めの花をまもりて。

晝顔や。涙をのせてゆく車。

南風なんふうや。南をおもふ人と鳥。

なつ草に晝の月みてわかれけり。

あひ遇ふや、暑さうなつらがまへして。



蝙蝠や、和讃に似たる「文選」うた。

新緑や。人寄る辻の焼鳥屋。

夕立や、白猫をどる女が膝に。

炎天や、眼ひらけばわれひとり立つ。

炎天や、みづから刺さん街上に。

炎天や、街上に鶴嘴をあぐ。

炎天や。爆裂弾をふところに。

日ざかりや、雲をながめて南しぬ。



炎天や、日夜なき烟突のなか。

おもひなき宵や、河原の月見草。

葉やなぎを見てまたねむるつかれかな。

「いづらゆく？」「飴屋の笛のゆく里へ。」

### 第三輯

明治三十八年—同四十一年春

三月の夢の火をよぶさくらかな。

春風しゅんぷうや。君も野の鳥、われも鳥。



犬の眼の露けきと、女がさかしきと。

市なかや、塵まふ秋の日に立てば。

落日や、火事の火をうら悲しげに。

八面に蟲なく晝の草場かな。

青嵐せいらんや、草場をはしる雲の影。

青嵐や、はたはたと音する木の葉。

ゆく春をかへせ夕日のさかづきに。

人死ぬる日か、春くるるあらしかな。



石竹や。おもひでの頬はほてれども。

わかき日の玉つくる日や、門やなぎ。

草かりや、さつきの雨にぬれながら。

檜葉の葉の格子をのぞく水無月は。

あさ顔は星のかたちにしほみけり。

六月や、さざなみ色の雲見れば。

はつ夏の雪よと見えて白つつじ。

晝の月、米とぐ人にほととぎす。



風すどて晝くりし戸や、ほととぎす。

千年につたへ、落花の一日を。

井戸ばたに木の花おつる四月かな。

あつき日を李もてくる娘かな。

地のはての夕立雲を見る人は。

ゆふだちや、水をはなるる水の影。

さみだれの森よりでたる女かな。

花買ふとはつ夏びとは傘さして。



人よぶや、はつ夏茶屋のすだれより。

きみにさす暮の盃、金盞花。

渾沌と七月くるる嵐かな。

はな賣のつつじや、夏の花ませて。

あき草や。三味線うつす人と人。

栗の實や。世帯なれてはそむく人。

泉水や、五月の雲のはしるかげ。

窓ちかき榎の幹にゆだちかな。



なでしこや。まつ人もなき風の晝。

秣刈る子とすれあふや、夏木立。

みな月は水菓子屋よりかをりけり。

くさ花のあかき花燃え、夏木立。



ここにその書簡の一節を掲げ本第三篇の爲め新らしく表紙畫を  
 惠まれました竹久夢二氏に感謝の意を表します。(朝)

たいへん急なことのやうにおもつたのと「唐人笛」といふ書名からすぐに  
 これだと思ひついてとりあへずお送りしたものが間にあつて好かつたとお  
 もひます。しかし間にあはせたものでないことは信じて下さい。……夢

朝風詩歌集第三篇目次

序言

唐人笛

うすい光に	大正七年一月	一
宵の灯	大正六年初冬	二
花終	大正六年初冬	三
夜曲	大正六年晩秋	四
犬蓼	大正六年秋	五
この眼を覆へ	大正五年八月	六
風は光は	大正五年八月	七



しぐれさん  
部室のうち  
品川小景  
月はかなしや  
短景  
笛  
温室の悲劇  
いろ里  
悔の日暮  
夫の商標から  
マツ子の商標から

大正三年秋  
大正三年晩秋  
大正二年秋  
大正二年秋  
大正二年秋  
大正二年晩夏  
大正二年八月  
大正二年八月  
大正二年八月  
大正二年八月  
大正二年八月  
大正二年八月  
大正二年八月  
大正二年八月

二六  
二九  
三二  
三三  
三三  
三四  
三五  
三六  
三八  
三九  
四〇  
四一

才  
浅  
暗い夜みちを  
神のあかりがよ  
雪のあかりが  
あかんぼの眼  
ホ  
断曲の  
さなりでは  
断曲の  
帆

大正五年八月  
大正五年三月  
大正五年二月  
大正五年一月  
大正五年一月  
大正五年初冬  
大正五年初冬  
大正五年初冬  
大正五年初冬  
大正五年初冬  
大正五年初冬  
大正五年初冬  
大正五年初冬  
大正五年初冬

二三  
二四  
二五  
二六  
二七  
二八  
二九  
三〇  
三一  
三二  
三三  
三四  
三五  
三六  
三七  
三八  
三九  
四〇  
四一







## 朝風詩歌集刊行會趣意

私達氏に最も親しい者相謀り、今郷國加賀の一新聞社に職を奉ずると共に、雪猶ほ深い白山の麓に、思想、藝術方面に於ける獨自の途を心靜かに歩みつゝある私達の詩人西出朝風氏が、過去十餘年間の製作に係る詩歌集の刊行を企てました。

氏が其若い半生を費して成した詩歌の事業が、日本文藝史上に如何なる位置を占む可きか、夫れは私達親しい者の言葉で假定するよ

りも、反つて私達が世の批判を聴かうとする者であります。刊行の趣意の一半は茲に存します。

ただ回想的に氏の詩歌事業の外面に就て二三を記しますれば

一、(俳句方面)氏が最短の詩形俳句を試みたのは比較的遅かつたが、其主張は出發に於て已に極めて自由で、聽て當時の因襲であつた「俳趣味」「唯叙景」「唯客観」「季題趣味」「題詠」等を排した文章を公表する間に新興俳句分野の大部分を占めた觀ある日本派に所謂新傾向派を生じ、新傾向派に更に分派を生じ、一步一步氏の主張の蹤を従ひました。然し其最善な者を批評して氏は猶ほ「大體善良な方面へ進んだが、詩の根本要素である音樂に全然無自覺だ」と言つてゐます。これは



俳句を純正詩(律語詩)にしようとする氏に於て當然の事であります。

一、(短歌方面)短歌に於て十七八年前の試作に緒を發し用語革命(現代語使用)を絶叫して來た事は最も世に知られた事實で、最近數年は一般をして氏を専門歌人のやうに思はしめた程、此詩形の製作に傾倒しました。尙ほ氏は用語革命と共に俳句同様短歌の純正を擁護して、彼の「破調」等を極力否定しましたが、「破調」が瞬時で姿を隠し、用語亦日を追うて氏の主張に進んで來た事も事實です。氏は前者に就て言つてをります。「内容と表現とが不離一體の者であるとしたら、用語革命は普通に信ぜられる以上に重大な意味がなければならぬ」と。

一、(長詩方面)長詩では氏が生粹の現代語新詩(俗語體等でない)を試作して間もなく、彼の口語詩運動が起り、前後して詩壇一般散文風に趨つて、兎もすれば詩體

の純粹である純正詩(律語詩)を忘れようとしたのに對し、飽迄純粹の擁護に努めて今日に到りましたが、爾後詩壇の傾向は漸次氏の歩みに近付きました。

斯う見て來ます時、氏が若し何等かの學閥、黨閥に縁故を有つてゐましたなら、詩歌集の如き恐らく數年前に上梓された事と信じますにつけ、私達今次の企ては詩歌を愛されます江湖諸賢の御賛同を充分期待し得る者と存じます。切に御援助を希望します。

大正七年三月

發 企 人



京都市	竹久夢二	森井つゆ草	岡野かたる
東京市	上田龍耳	吉田鼓山	天明愛吉
神戶市	野口未代策	土肥省作	西出悌二
石狩市	伊東音次郎	荒木巖	
岡山市	山田禎一		
大崎市	福田義正		
備後市	森田熱郎		
甲府市	望月喜雄	佐竹雨雀	
能登市	四京悲月		
加賀市	草野曉の		
金澤市	額見白露	西尾舷染子	三枝紅薦
	土岐ましろ	上田良作	木戸萌二
	太田榮	川端しのぶ	丘村泣三
	上森雨橋	木村志郎	藤村不三
	山岸忠恕	椎木恒男	西出つ木女
	石浦露の香		

### 朝風詩歌集刊行會規定

- 一、詩歌集は叢書として毎月一冊宛、若干月（六箇月以内）に互り刊行します。
  - 二、每冊新裁四六判百二三十頁内外、弘い愛讀を希望する趣旨に於て體裁の虚飾を避け、印刷、製本費等の低廉を期します。（一冊發賣定價參拾八錢）
  - 三、會員はA、B二種とし
 

A會員會費	月額	參拾五錢
B會員會費	月額	五拾錢以上
- B會員は特に刊行會の事業を援助する者です。



朝風詩歌集第一篇目次

(卷上 戀の生半と餓の上)

序	北國流言	三十の戀	ある男のなげき	ある男のなげき前曲	をはりの首都生活	残した妻子へおくる消息	うき世	死んだ白雨君に	續 踏「山より」
	大正四年春—同六年中	大正五年夏—同六年春	大正五年初 夏	大正四年 春	大正三年初秋—同四年春	大正三年 七月	大正三年 五月、六月	大正三年 六月	大正三年 春
	—	二二	五三	五九	六二	八二	九〇	九六	一〇二

竹久夢二氏

- 四、A會員には毎月叢書一冊を配付し、B會員には記念の爲め同上番號記入、朝風氏自筆署名、特刷(非賣品)一冊を配付します。
- 五、賛同者は入會と同時に會費二箇月分を拂込み、以後冊子受領毎に翌月分會費を拂込み、最初拂込の内一箇月分を最後の會費とします。
- 會費は冊子到着を以て領收の證としますが、別に領收證入用の方は往復葉書又は返信用郵券添送を願ひます。
- 六、入會申込所 純正詩社内朝風詩歌集刊行會
- (附記) 會員は本篇著次第次月分の會費を御拂込み下さい。既刊所要新入會諸君は既刊分會費同送の事。



次目篇二第集歌詩風朝

(卷下餓と戀の生半)

海岸町の二年	大正元年初秋—同三年春	一
餘情	大正二年六月	二七
きづな	明治四十四年九月—大正元年八月	三三
洲崎の埋立地に立つて	明治四十四年春—同夏	四二
そののちの歌	明治四十三年十一月—同四十四年春	四五
そのころの歌	明治四十三年夏秋	五七
少年の歌	明治四十三年五、六月	七〇
少年の歌	明治四十二年初冬—同四十三年五月	九一
幕	明治四十三年三月	九八

(第五篇) 感想録 周圍の兄弟へ 五十篇 八月五日發行

これは彼の詩歌を裏書すべき、さうして詩歌よりも更に直接な言葉を以てした文明批評だ。また最も社會的な散文詩集と見てもいい。  
この書を読んで初めて彼の詩歌の庶民の出發に就て充分な了解を得られよう。同時に、彼の詩歌がその灼熱の革命的思想を歌ふに如何に至純な音樂的言語を擇んだかを知る事が出来る。

(第四篇外篇) 著者各時代の寫眞數箇挿入 七月廿日發行  
西出さち著 うつ木歌集 眞實の婦人の言葉を以て婦人の生活を歌つた日本最初の詩歌三百數十章



### 朝風氏記念短冊色紙頒布會

詩歌集刊行を記念し其愛讀者諸君の爲め朝風氏揮毫短冊色紙頒布會  
を作りました。御申込を希望します。(朝風詩歌集刊行會同人)

(揮毫種類) 甲、俳句と小畫。乙、短歌と小畫。丙、小曲又は

長詩の一節と小畫。氏の作中愛誦の章句を希望し得ます。

(短冊會費) 1、縁金紙地七十錢。2、縁金絹地、純銀箔地一

圓二十錢。3、純金箔地二圓。

(色紙會費) 4、縁金紙地一圓二十錢。5、縁金絹地、純銀箔

地二圓。6、純金箔地三圓。

會費は申込と同時に拂込の事。揮毫は一週間以内に發送します。